

日本の学童ほいく

全国学童保育連絡協議会

普及拡大 ニュース

みんなで読もう！ 目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。みんなで読んで、語って、楽しみながら、よりよい学童保育をつくっていきましょう。

2022年11月16日

元気が出る
みんなの
取り組みを
ご紹介

楽しく普及拡大

ほいく誌購読が私たちの活動の生命線！
購読の仲間を増やそう！

4月はほいく誌普及拡大に取り組む大切な月！

4月当初のほいく誌の申し込み数によって、岐阜県連協の1年間の予算（活動費）も予想されることから、まずは新学級の4月に、ほいく誌の年間購読を訴えてきました。学童保育への理解を広め・深めるという観点からも、ほいく誌の購読数を「減らさずに少しでも増えるように」という気持ちで取り組んでいます。

●具体的な取り組み

[公営の学童保育へは] …… 学童保育に毎月1冊ずつ配布できるよう、毎年、自治体担当課に年間予算に購読の費用を組み入れていただくことをお願いする一報を入れています。

[保護者会運営（委託）へは] …… 保護者会で1世帯1冊ずつ毎月購読することをお願いし、保護者会総会で承認してもらっています。

この2年ほどは、コロナ禍で指導員会や保護者会があまり開かれなかったところもあります。こういうときこそ、ほいく誌をじっくり読むことで、「学童保育とは何か」、「学童保育の大切さ」を知ることにつながると思います。

学童保育への理解をもっと広げよう・深めよう！

指導員の研修の一環に位置付けて、研修費で購読している学童保育もあります。また、「放課後児童支援員認定資格研修」では、ほいく誌のバックナンバーを見本誌として配布しています。特に講師の先生が話のなかでほいく誌の紹介をしてくださると興味を示していただくことができ、「見本誌ですからご自由に持って行ってください」と声をかけると、購読申込みにつながる場合もあります。

今年度、新たに連協に加入してくれた学童保育もあり、全世帯でほいく誌の購読となりました。岐阜県内の購読数は決して多くはないのですが、保護者会運営（委託）や企業委託、公営の学童保育でも持続して購読してもらえており、幸いと思います。

岐阜県 の 取り組み



日本の学童ほいく11月号 特集 知って・学んで・考える ——子どもとインターネット

今回の特集では、インターネットに関わる知識や利用状況、子どもを取り巻く社会状況を学ぶとともに、読者から寄せられた実態を交流し、「子どもを守る」という視点から、「子どもとインターネット」について考えあいます。



日本の学童ほい・く

みんなで読もう目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。

普及拡大 ニュース

2022年11月16日

読者の声

長崎県東彼杵町 ● 保護者から

秋だから！ というわけではありませんが、夏の暑さや子どもの宿題・工作などから解放され、活動しやすくなった時期にランニングや散歩をするのが楽しみです。2021年の秋は、学校の「自転車免許皆伝」の学年になった長男が自転車にまたがって主人のランニングに伴走し、次男は私と一緒にコースをショートカットして「どっちが早く着くかな～」と走ったり歩いたりしながら、緑から黄色に変わりつつある田んぼ道を通りました。今年は、長男が主人と一緒にランニング。そんな長男の背中を追いかけるのに疲れ、遅れて歩く私と一緒に次男はゆっくりと秋探し……。そんな過ごし方ができるといいなと思います。そしてなにより、毎年子どもたちの成長とともに変わりゆく秋の楽しみを満喫したいです。

『日本の学童ほい・く』2022年11月号「私の○○の秋!!」Part 2より

愛知県名古屋市 ● 保護者から

季節のイベントは学童保育にほぼ“おまかせ”だったなあと思いつつ、「秋」と考えたとき、小学生のときの学会と作品展が思い出されました。「工作をするからティッシュの空き箱、トイレトペーパーの芯がほしい」と急に言われても、都合よくあるわけではなく、中身を取り出して別の箱に移してみたり、ほしい大きさの箱を求めてスーパーにお菓子を買に行ったり……。 「この箱がなにになるのかしら」と思いながら作品展を見に行き、子どもたちの柔軟な発想におどろかさされたり、さまざまな学年の子ども作品を見ることで、子どもの成長も感じられたと思います。秋は私にとって「発見の秋」であり、「準備に追われる秋」なのかなと感じました。

『日本の学童ほい・く』2022年11月号
「私の○○の秋!!」Part 2より

港から続く長い坂道の先にある真っ暗な路地の一軒。少し開いた引戸から漏れてくるあかりがくたびれた勤労学生の足元をそっと照らしてくれる。見ず知らずの青年の足音を聞いては「今日は遅かね」などと、あれやこれや語り合う老夫婦。それは二人にとって「小さな」しあわせだったのかもしれない。長崎の高校を卒業して明日上京する青年は、物言わない戸に向かって一礼する…。松崎運之助さんの「連続エッセー 心の散歩道」。未だ新人の域を出ない5年以上前のこと。心打たれたこのエッセーをいの一番に子どもたちに伝えたくて、途中鼻の奥が熱くなって言葉に詰まりながら語ったことが思い出されます。クラブの「おたより」でもこのエッセーを紹介しました。当時2年生だった男の子が、その後私が初めて異動した児童館へひょっこり葉書をくれたことがありました。落ち込むことがあって、「はぁー」とため息をついて座った視線の先に私宛の葉書があり、「えっ!」と思い、裏を返すと「お元気ですか?ぼくは…ができるようになりがんばっています。ます川先生も…じどうかんでがんばってくださいね」と、見覚えのある大きく丁寧な字が目飛び込んできました。過去の出来事や他人の言動がよく見えて、苛立ってしまうこともあった彼でした。そんな時、気持ちが少しでも落ち着くようにと、保育園時代の話に耳を傾けたり、書くことが好きだったので「今の気持ちを手紙にして私にちょうだい」と声をかけていました。彼の葉書の文面は「新人の私を育ててくれた子どもと保護者を裏切ってはいけない」「がんばれ、私!」と思わせてくれるものでした。彼が意図しない、まさしく「小さなしあわせ」に思わず「ふっ」と私の頬は緩み、と同時に心の情景で結ばれた絆を感じずにはいられませんでした。

心の琴線に触れる珠玉の言葉がちりばめられた憧れの「ほい・く誌」。「わたしは指導員」の原稿依頼を受けたときは、「保護者にお叱りを受けたこと」「子どもの心を閉ざしてしまったこと」失敗談を思いっきり綴りました。そんな「ほい・く誌」! どうぞ一度手に取ってみてください!

私と「ほい・く・誌」

読者リレー執筆・今月は広島県広島市から
指導員の増川久美子さん